

夢よりもはかなき世の中を

夢¹よりもはかなき世の中を、嘆
 きわびつつ明かし暮らすほどに、
 四月²十^{うづ}余^き日^{じふ}にもなりぬれば、木^この
 下暗³がりもてゆく。築土^{きつち}の上の草
 青やかなるも、人は殊に目もとど
 めぬを、あはれと眺むるほどに、
 近⁴き透垣^{すいがき}のもとに人の気配^{けい}すれば、
 誰^{たれ}ならむと思⁵ふほどに、故宮^{こみや}に候^{さぶら}
 ひし小舎⁶人童^{こねりわらは}なりけり。



和泉式部(百人一首画帖模本)

- 1 夢よりもはかなき世の中 冷泉天皇の第三皇子、為尊親王(九七〇—一〇〇三)との恋が、親王の死によつて絶たれたことを指す。國(はかないものとされる)夢よりも、なおいつそうはかない男女の仲。
- 2 四月 一〇〇三(長保五)年の四月。
- 3 築土 土手のように土をつき固めて造つた垣根。土塀。
- 4 透垣 一八ページ注3参照。
- 5 故宮 亡き為尊親王。
- 6 小舎人童 七六ページ参照。

*築土

あはれにものおぼゆるほどに來たれば、「などか久しく見えざりつる。

遠1ざかる昔の名残にも思ふを。」など言はずれば、「そのこと1と候はでは、

なれなれしきさまにやと、つつましうさぶらふうちに、日ごろは山寺にま
かり歩きありてなむ。いとたよりなく、つれづれに思ひたまうらるれば、御代

はりにも見たてまつらむとてなむ、帥宮2に参りて候ふ。」と語る。「いとよ

きことにこそあなれ。その宮は、いとあてにけけしうおはしますなるは。

昔のやうにはえしもあらじ。」など言へば、「しかおはしませど、いとけ近3

くおはしまして、『常4に参るや。』と問はせおはしまして、『参りはべり。』

と申しさぶらひつれば、『これ持て参りて、いかが見たまふとて奉らせ

よ。』とのたまはせつる。」とて、橘たちばなの花を取り出いでたれば、「昔4の人

の」と言3はれて、「さらば参りなむ。いかが聞きこえさすべき。」と言へば、

言葉にて聞きこえさせむもかたはらいたくて、「何かは、あだあだしくもま

だ聞きこえたまはぬを、はかな6き言ことをも。」と思ひて、

薰かそる香かによそふるよりはほととぎす聞きかばや同じ声やしたると

と聞きこえさせたり。

1 「遠ざかる昔の名残」とは、何を指すか。

1 そのことと候はでは 闕 これという用事ことがございませぬでは。

2 帥宮 冷泉天皇の第四皇子で、為尊親

王の同母弟の敦道親王（九八一—一〇〇七）。

3 けけしう 近づきがたく。

4 「常に参る」とは、誰がどうすることか。

4 昔の人の 「五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」（古今和歌集）詠み人知らずを踏まえる。

5 「言はれて、」言へば、「の主語は、それぞれ誰か。

5 言葉にて 口頭で。

6 はかなき言 闕 とりとめもない和歌。

まだ端におはしましけるに、この童隠れ⁷の方に気色^{8*}ばみける気配を、御覧じつけて、「いかに。」と問はせたまふに、御文^{ふみ}を差し出でたれば、御覧じて、

同じ枝^えに鳴きつつをりしほととぎす声は変はらぬものと知らずや

と書かせたまひて、賜^{たま}ふとて、「かかること、ゆめ人にいふな。好きがましきやうなり。」とて、入らせたまひぬ。

学習の手引き

【読解】1 帥宮が「橘の花」を贈ったのはなぜか、(一三・一)

ジ注4を参考にして考えてみよう。

2 「薫る香に」(一三・14)の歌と、「同じ枝に」(一三・

4)の歌における「ほととぎす」は何をたとえているか、考えてみよう。

現代語訳

次を現代語訳してみよう。

- ① 故宮に候ひし小舎人童なりけり。(一三・8)
 ② つれづれに思ひたまうらるれば、(一三・4)

4 「おはしましける」の主語は誰か。

7 隠れの方 物陰。

8 気色ばみける気配 せき払いなどをして合図すること。図様子ありけなふうをしてい。

*つつまし け近し 聞こえさす

あだあだし 気色ばむ ゆめ…な